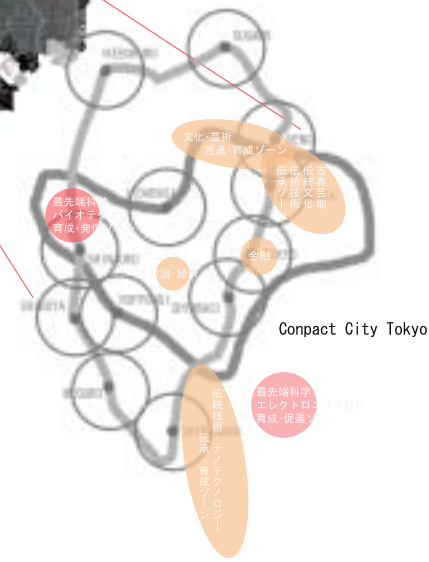




「BIO CORE CAMP」
—科学技術都市の中心拠点として—

東京の都心パランスを回復する文化的「ヒューマンインフラ」を成立ものとして考えられるのが、日本が世界に誇る伝統技術にナノテクノロジーが支える、最先端科学ビジネスである。羽田の国際線乗り入れでアジアの経済中心街として期待される東京は「科学技術都市」としてアジアや世界の一躍を担うべく要素を都市の中から引き出し、補わなければいけないと考える。現在、最先端科学技術は大きく2つに分けられる。その一つであるエレクトロニクス技術は2000年「国際研究交流大学科」が編成されるなど、基盤が整備されている。もう一つは私たちが普段食べている味噌、納豆や酒などの「発酵食品」や「ヒトゲノム計画」などに代表されるバイオテクノロジーである。しかし、このバイオテクノロジーは、私たちの生活で最も身近な科学技術であるにもかかわらず、一般にはほとんど知られていない科学技術でもあり、牽制強化させる基盤も整備されていない。

今後、東京が「科学技術都市」として進出していくにはこのバイオテクノロジー技術を一般に広め、エレクトロニクス技術と同様にアジアや世界にうってでられるよう牽制強化していくことである。



コンテキスト—百人町—

都心は太平洋ベルト上に位置する品川、大井町などの「工業地域」、大井町、市ヶ谷、麹町、豊町などの「金融・政治・経済地域」、上野、浅草などの「文化・芸術地域」と秋葉原、新宿の第4次産業を主体とした「ハイテク地域」とに大きく分けることができる。

「百人町」はそれらの地域を繋ぐ山手線「新大久保駅」と新宿・秋葉原を繋ぐ中央線「新武蔵野「大久保駅」に挟まれた扇形に位置し、巨大繁華街である新宿と池袋の要所となってしまった地域でもある。



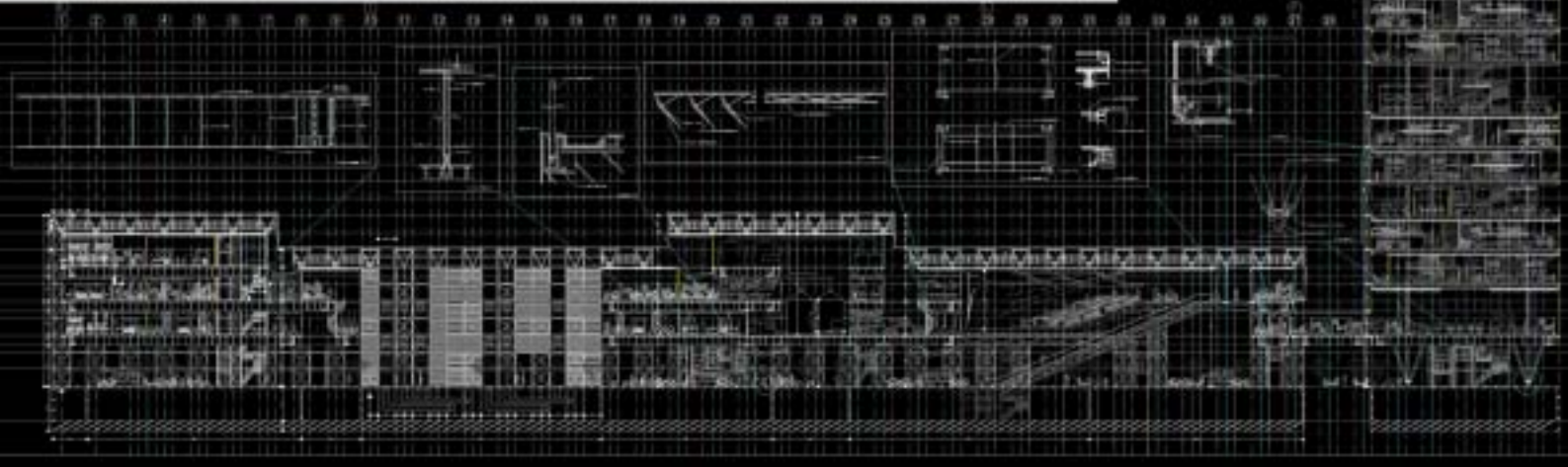
江戸時代

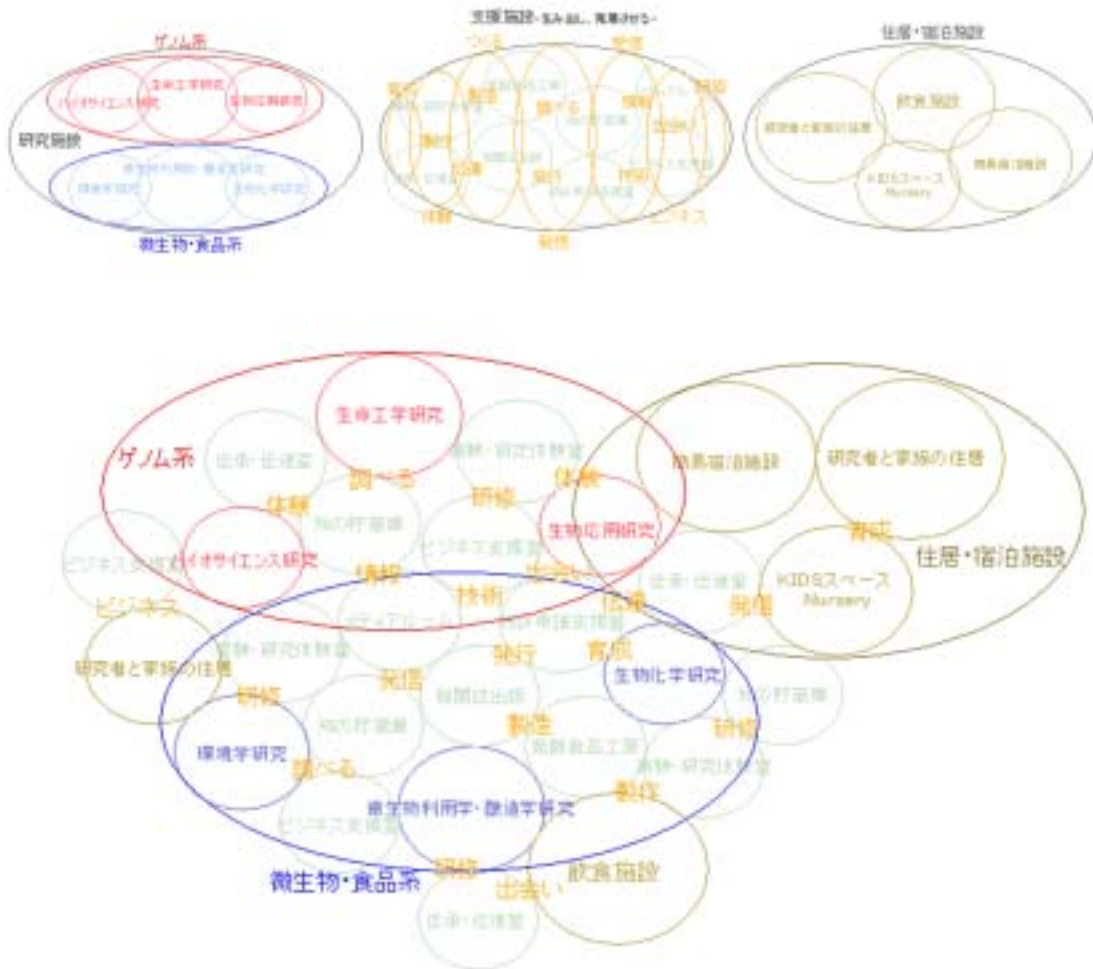


現在



街角は地図からも見るとできるように周辺が不自然に縦割りの道となっている。これは「伊勢屋」の同心組屋敷の名残で、徳川の時代練馬場があったため、形跡が縦割れ・横割りの配置となっていると言われている。この百人町3-4丁目地区は集合住宅と研究施設の融合を計った「都市再生地区」として両開発が計画されており、これまでに西側と北側に沿って中高層マンションが建設されているが、研究施設の整備は未だに行なわれてはいない。





掛け合わされた研究施設

機能構成

を融合させ調べる最先端研究-

計測室・分析室3室づつ 195㎡×2

高圧実験室 (共有)

バイオサイエンス研究

-ゲノム解析により人間の根源を探る-

実験室 (クリーンルーム) 3室 195㎡

+R1室・恒温恒湿・低温室

-地球上に生存する生物のアミノ酸などの酵素を調べる-

研究室3室 10人 126㎡

計測室・分析室・飼育室2室づつ 195㎡×3

微生物利用学醸造学研究

-微生物を利用した食品加工と微生物の可能性を探る-

計測室・分析室・培養室3室づつ 195㎡×3

+恒温恒湿室・低温室 (共有)

生物環境学研究

-生物・微生物が生存できる環境と条件を探る-

研究室4室 15人 168㎡

実験室 (クリーンルーム) 3室 195㎡

計測室・分析室・飼育室2室づつ 195㎡×3

+恒温恒湿室・低温室

生物化学研究

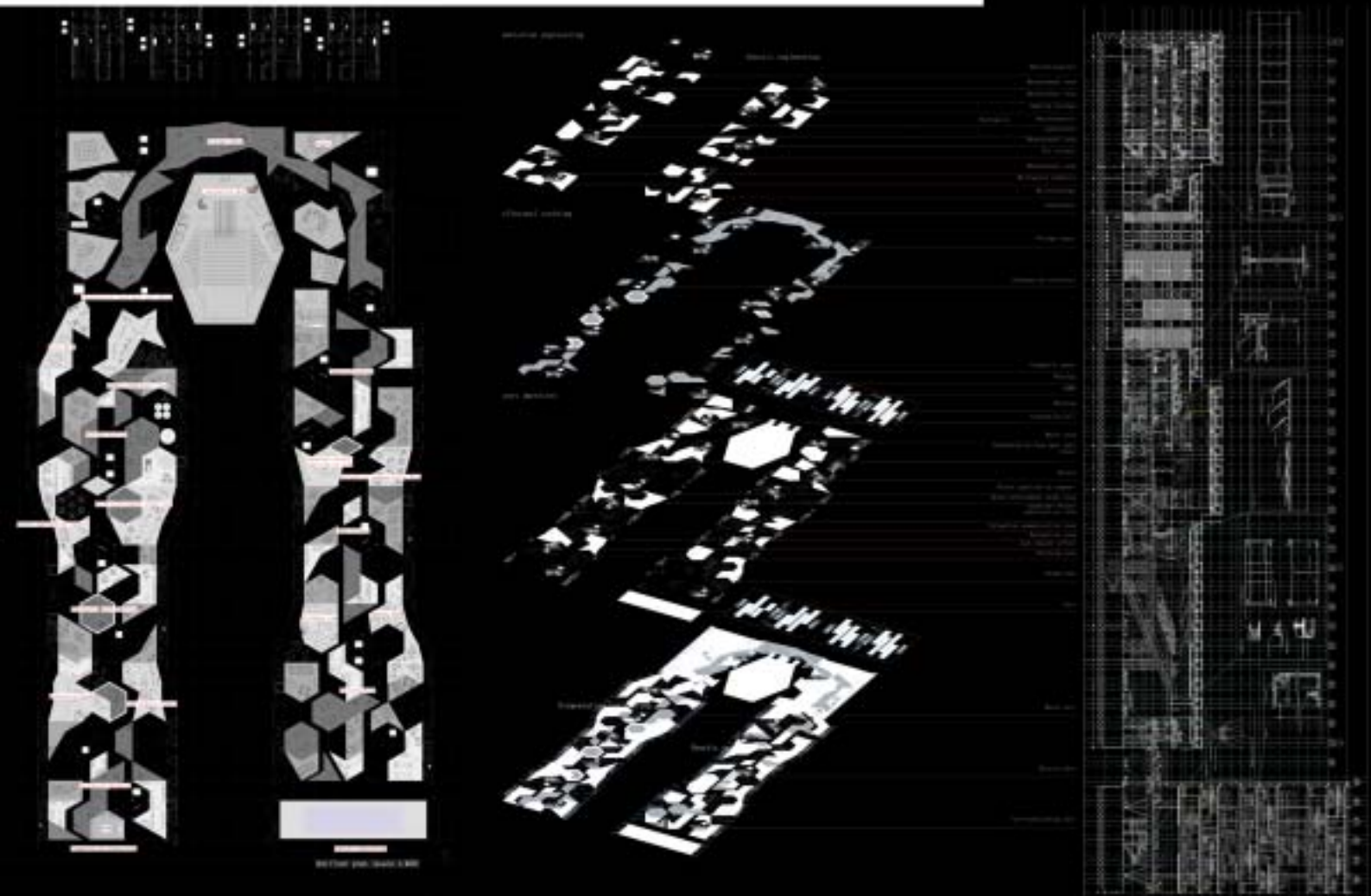
-ワクチンとなる成分を地球上に生存する生物・微生物から探る-

実験室2室 (バイオクリーンルーム) 120㎡

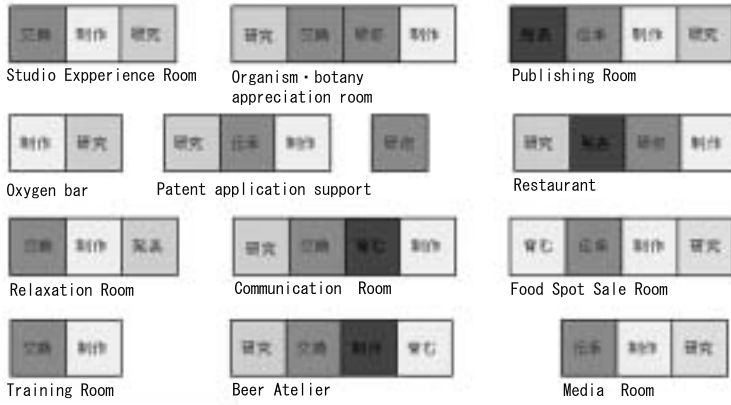
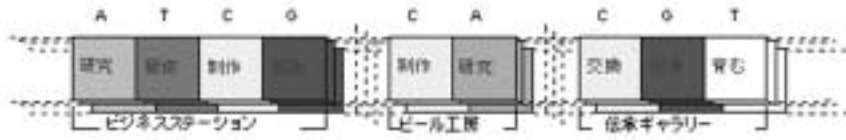
+R1室・恒温恒湿室・低温室

高圧実験室 (共機)

支援施設-生み出し、発展させる-



1. ゲノムによる機能構成



構成手法

1. ゲノムによる機能構成

アデニン、チミン、グアニン、シトシンの4塩基の組合せでDNAの働きが決定されるように、

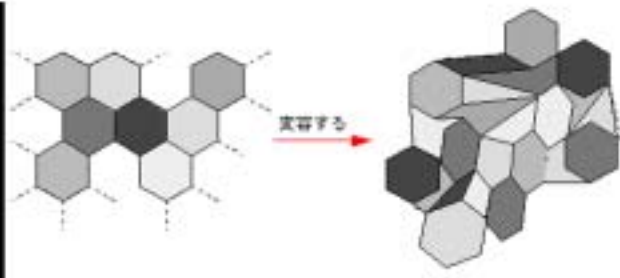
A: 研究 (研究施設),

T: 育成 (育む・学び),

C: 交流 (つくる・食べる・換える),

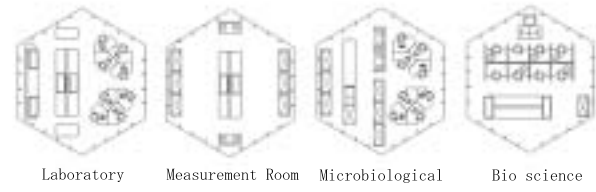
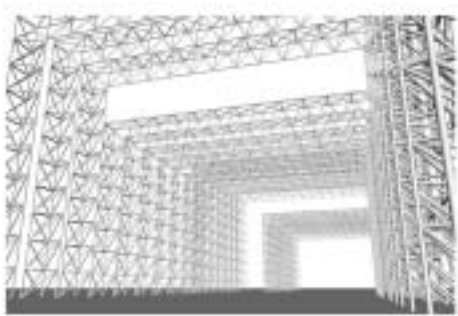
G: 発信 (伝え続ける・発表する)

と各機能から要素を取り出し、その組合せを変えることで施設を構成する。



2. 変容するスラブと空間の構築

自然界でも安定した正六角形のユニットを用いることで、安定し成長するスラブを構築する。



3. フレキシブルな設備空間と大パン空間を可能とする架構システム

経済的に大空間を可能とするスペーストラスと自由な吹き抜けを可能とするハニカム構造スラブによって研

